

タニシ

井の口 昭久

最近の朝日新聞に「戻らない復興予算」という記事が掲載されていた。記事の趣旨は、予算が被災地以外に使われるのはけしからんということであった。震災復興予算が、鹿児島でジャンボタニシを駆除する費用に使われていたというのである。

私は「タニシ駆除」というのが気になった。私にとってタニシは食べるものであって駆除するものではなかった。

戦後の食糧難の時代には、タニシは貴重な食べ物であった。今ではタニシは水稲に被害を及ぼす有害動物に指定されているらしい。私が生まれて育った伊那谷は中央アルプス

と南アルプスの間にある。天竜川沿いは広い平地であり、山脈のすそ野は森林地帯である。森林の間には集落があり、外来種であるタニシが生息している地域とタニシが全く住んでいない地域があった。

母は山に囲まれた集落に生まれ、天竜川沿いの集落へ嫁いだ。曇一曇ほどの雲に太陽の光を遮られる距離であったが、母には遠方であった。嫁ぎ先の田圃ではタニシは捕れたが、母の育った孤立した集落の田圃には外来移入種であるタニシはいなかった。

母は、山の中に暮らす母親と兄弟のために田圃でタニシを捕って実家へ届けようと思っ

た。母の実家は飯田線の電車に乗って、バスに乗り継ぎ、さらに歩いていかなければならなかった。

母に連れられて私は飯田線の駅のホームで電車を待った。母親は久しぶりの里帰りで嬉しそうであった。母が愉しいと子供も楽しい。

親子2人でタンポポの咲く駅で電車を待った。プラットホームには着物にモンペをはいた22歳の母親と、麦わら帽子をかぶった3歳の男の子のほかには誰もいなかった。駅舎には手拭いを腰にぶら下げた若い駅員がいた。昭和22年の梅雨の晴れ間であった。

北に向かう山脈が交わるあたりから線路が始まり直線に伸びてくる。

雲の谷間から湧き出るように電車が現れた。電車は次第に大きくなり、「ことごと」と耳に響く音が強くなってきた。

電車がホームに迫ってくると私は「おしっこ」と言った。その年のころから私は緊張するとおしっこがしたくなった。

母親は私をぶら下げてホームの脇の便所へ行ったが、おしっこは出なかった。電車は駅に止まって待っていた。

母親は急いで体を回転させたので草履が横を向いて鼻緒が切れた。

それを見ていた若い駅員が駆けつけてきた。腰にぶら下げていた手拭いを裂いて紐にして、母親の草履の鼻緒を作ってくれた。駅員は母の足元に屈み込み、母は申し訳なさそうに駅員の肩につかまった。

運転手は窓から顔をだしてプラットホームの光景を見ていた。そして私たちが電車に乗り込むのを待っていた。

戦争で父親を亡くした子どもと、その母親と、タニシを乗せて電車はゆっくりと走り出した。



道化師のタンバリン